

論文の和文要旨

論文題名 中島敦研究——異空間の探求と表象——

氏 名 陸 嬋

本論文は、それぞれ朝鮮半島・中国東北部・南洋群島・匈奴の四つの異国的空間を舞台にして書かれた中島敦（1909-1942）の作品を精読し、そのテキストに潜んでいる異空間への探求とその表象を明らかにすることで、当時の日本（人）像を捉えたものである。各章の概略を以下の通り記する。

第一章「中島敦における朝鮮表象——『巡査の居る風景』を中心に」では、同時代の朝鮮表象の文学言説の特徴と『巡査の居る風景』の独特性を明らかにした上で、作中の主人公たる趙教英と『虎狩』の主人公・趙大煥の人物造形における共通点を追究した。本作品と同時代の朝鮮表象の文学言説を整理し分析を行った結果、強い日本・日本人と対照的な弱い朝鮮・朝鮮人を描き出す作品が当時の主流であり、朝鮮人の対日感情などがまだタブー視されていた中で、被支配者の朝鮮人の視点から書かれた『巡査の居る風景』は実に独特な存在であることを明らかにした。趙教英の人物像を考察するにあたって、彼が日本人の統治を受ける被統治者側の人間でありながら、巡査として朝鮮人同士を管理・統治する側にもいることを解明した。趙教英のこうした身分の混乱によってもたらされた自我認識の亀裂の問題に焦点を当てて分析し、さらにこれが『虎狩』の趙大煥の人物像にも共通していることも明らかにした。この作業によって浮上してきたのは、当時、朝鮮における同化政策が進まれた中で、現地にいる朝鮮人と日本人の間にはアイデンティティー認識のギャップが消えないままであり、また階級差別の重層な構造も見受けられた点なのである。

第二章「中島敦が見た昭和初期の中国の一側面——『D市七月叙景（一）』を中心に」では、『D市七月叙景（一）』を精読する作業を通じて、中島敦が見た昭和初期の大連表象を浮き彫りにするとともに、登場人物たちの日常生活風景の背後に非日常的な植民地支配の影響が潜んでいると結論づけた。作品の題名に出る「D市」というイニシャルの暗号化を分析し、当時の大連は日本人、ロシア人、中国人が混在し、歴史的にも政治的にも、三つの民族による渦巻き状の葛藤の中心地であったことを明らかにした。支配したロシア、支配する日本、支配される中国、いずれなくしても大連の町が形成されないという本質的な条件に焦点をあて、中島敦は満州生活者上層部の「M社」（満鉄）総裁、中層部の「M社」社員と下層部の中国人苦力（労働者）をそれぞれの断章の主人公として登場させた。三つの階層の間には明確な相関関係は存在しないものの、三者の日常生活に散見される「不安」と「混乱」にはいずれも植民地支配の非日常的要素が潜んでいることで一致することを究明した。『D市七月叙景（一）』は即物的日常描写と植民地の非日常的要素を同時に取り入れ、日本人である「おのれ」と中国人である「他者」の共通点、すなわちますます植民地化されてゆく日本の支配の実情への不安を抉り出した作品である。

第三章「『北方行』に関する一考察——アイデンティティーの探求を視座として」では、「アイデンティティーの探求」というモチーフに注目し、主要な登場人物である三造と白夫人母娘をめぐるアイデンティティーの問題とその原因を射程に入れて考察すると同時に、テキストの問題点や作品執筆と作者の伯父・中島端との関連性を論じた。〈三造物語〉の系譜に属する『プールの傍で』『北方行』『狼

疾記』の細部を分析、考察することで、『プウルの傍で』の場合は、主人公の少年期の思い出がテキストの大半を占めており、三造は完全に中島敦の分身だといえるが、『北方行』とその後継作品である『狼疾記』の場合は、『プウルの傍で』の「肉体」と「精神」の二元論的問題というメインテーマを継承しつつも、体験的要素を活用する私小説的手法への寄りかかりが捨てられ、異なる国家や人種のなかで感じ取った自らのアイデンティティーの探求や存在への不安に作品の重点が置かれていることが明白なものとなった。

さらに『北方行』においては、「権安生」という朝鮮人青年の話に多少触れられるものの、実際には中島文学の朝鮮物はこれで終焉を迎えており、その後中島敦は次第に作品の舞台としての中国へと目を向けるようになっていった。結婚を契機に中国国籍を取得した日本人女性白夫人と娘の英美が直面したアイデンティティー危機は、中国と日本の境界の狭間に生きながら動揺しつつあるという現状に由来するものである。特に日中混血児である英美の場合は、「母語」の日本語と「国語」の中国語の不一致から生まれてきた人種的・文化的アイデンティティーをめぐるジレンマがうかがわれた。本来なら、国語と母語の統一性によって構築されるはずのアイデンティティーの同一性が、白夫人母娘の場合においては二つのことばの混乱ゆえに亀裂を生じさせてしまっているのである。『北方行』は作者の実体験とは一切関わりがなく、詳細な資料調査などによって書かれた作品である。作品の時代背景である中原大戦と物語の舞台としての北平への描写に欠けるところがあるとはいえ、実際、この作品においては、北平という都市を表象化することなく、動乱の中原大戦の戦局の断片的なものが、登場人物の日常を浮かび上がらせるための装置として機能している。さらに、中島端をモデルにして書き上げられた『斗南先生』や中島端の著作への分析を通じて、中島敦は、それまで実体験のある外地しか描かないという中島作品創作の「手法」を破り、中島端がなくなったその年（1930年）の「北平」を作品の舞台として設定し、中原大戦の戦局に多大な関心を示したことは、熱狂的「支那通」とも言える中島端から受けた影響がそれだけ大きいものであった可能性を提示するに至った。

第四章「日本植民地支配下の朝鮮物語——『虎狩』をめぐる」では、作中の「京城」という時代的な異空間、植民者養成所とも言われる「京城中学校」とエキゾチックな虎狩りの場面の描写に注目し、作品には所々に散見される植民地的な要素に対する分析を行った。プロレタリア文学に親近感を持たない中島は、『虎狩』において直接の社会批判を取り入れなかったが、朝鮮という時代的な異空間を借りて、友人（趙大煥のモデル）への思いを馳せながらも、語り手の「私」の視線を通して、1920年代の朝鮮の実態を次第に浮き彫りにした。さらに主人公の趙大煥が本来の朝鮮人支配階層であった「両班」の出身で将来を約束されたはずのエリートであるにもかかわらず、最終的に反日運動に身を投じて当時の日本統治者層にとっての異端者となる運命を迎えたことで、当時の日本の朝鮮政策への作家の密かな疑問が表されているのである。

第五章「南洋行に関する一考察——「南の空間」における〈境界性〉を中心に」では、中島敦が南洋群島で認識した〈境界性〉を主な視点にして、南洋物の分析及び帰朝後に書き下ろした作品『李陵』との関連性を考察してみた。1941年6月から1942年3月に至る期間、中島敦は南洋庁編修書記として当時の日本委任領であった南洋群島(現・ミクロネシア)に赴任し、現地で多数の挫折を味わされた一

方、新たな認識も得られた。最初は、ロマンチックで未開の「南の空間」と想像していたが、中島が実際に見た南洋は文明と未開の〈境界〉的な位相に置かれていたからである。なお、南洋物に出てくる近代的な時間、病気などへの批判は、中島が覚えた戦争や植民地への不快感を洩らしている。また、帰朝後に仕上げた『李陵』から読み取れる〈匈奴〉への理解は、匈奴が持っている未開社会らしさに一因があり、作者の〈南洋行〉と深く関わっているのである。中島は、当時の南洋が文明と未開の〈境界〉的な位相に置かれ、温帯基準と熱帯基準の共存で一種の混乱に満ちている現状に目覚めたことで、この南洋行を通じて作家としての心境が変化したのみならず、中島文学の根底をなす作品主題もまた大きな変貌をとげたといえる。これらの考察によって、南洋物と『李陵』における二つの舞台および作中人物の視線の類似点より、こうした〈境界性〉への複雑な感情が南洋物の他に『李陵』からも読み取れたことを究明し、李陵が一種の〈境界者〉であることを証明した。

第六章「南洋表象と〈南〉の記憶——『南島譚』と『環礁』を中心に」では、同年代の日本人知識人が書いた南洋関連言説の特徴を究明した上で、中島敦の南洋滞在体験や見聞に基づく短編集『南島譚』『環礁』を分析し、中島における南洋表象をめぐり出した。昭和10年代は「南進ブーム」の黄金時代と呼ばれるが、この間に出版された南洋関係出版物には官庁出版物が圧倒的な比重を占めており、個人による作品はそれほど多くなかった。ただし、南洋群島と関わった文学者が少なかつたからとはいえ、南洋関連言説の存在を見逃してはいけない。同時代の日本人作者によって書き下ろされた作品を考察することによって、未開で無知の南洋島民というステレオタイプな見方が散見されていた当時の主流の南洋関連言説と異なり、『南島譚』『環礁』においては、いずれも南洋の習俗と現地の島民に好意と理解を示し、可能な限り客観的に南洋表象を描き出そうとしていたことを確認した。これは、中島敦が日本の価値観（文化）を相対化しながら、日本と異なる南洋の表象を広い視野で捉えていたが故であるとの結論を導き出した。

第七章『李陵』に関する一考察——「匈奴」という接点について」では、『李陵』における「匈奴」という異空間を視座にして、李陵・司馬遷・蘇武三人の登場人物の関係を再解釈した。中島敦の代表作として知られる『李陵』は、古代中国の漢王朝と匈奴を舞台にして書かれたものである。従来の研究では、李陵・司馬遷・蘇武三人の登場人物を抜き出し、人物像の比較に力点を置く論説が数多く存在しているが、作中における「匈奴」という舞台の重要性が等閑視されてしまう傾向が見られる。実際、匈奴が李陵にとって大きな存在であるばかりでなく、司馬遷にも生涯癒えぬ傷を負わせる原因を作ることになったため、中島は異空間と異民族としての「匈奴」を強く意識しながら、『李陵』の執筆に当たったと考えられる。また、この作品に司馬遷という人物を取り入れた理由として、司馬遷が李陵を弁護したことで宮刑に処されたのみならず、「李陵の禍」の裏には武帝の匈奴征伐に対する司馬遷の密かな批判の姿勢が誘因であったという真相を抉り出した。時代に翻弄されつつ、自らの力で人生を構築することができない李陵・司馬遷・蘇武の三人の登場人物たちは、昭和10年代の戦争下においては一般的な人世の縮図だ、という昭和初期の日本の現実でもあるのだ。

以上、述べたように、本論文は、朝鮮半島、中国東北部、南洋群島、匈奴といった異国的空間を舞台にして書かれた作品を研究対象とし、さらに作者の草稿・書簡・断片・手帳なども詳細に分析し、

中島敦の作品に潜む〈異空間の探求と表象〉の問題を考察した。これらの考察を通じて見えてきたのは、作品の行間に潜む当時の日本の現実への中島敦の関心と視線である。中島は自らの作品に多様な異空間を取り入れることによって、1920年代から1940年代までの日本の現実を巧みに盛り込んでいたのである。彼の作品には国策的色彩がないものの、時代性が薄いものでは決してないことが本論の考察で明らかになったと考えている。